

# 巴金「成都日記」について

野 間 信 幸

## 1. はじめに

中国の20世紀を代表する作家のひとりである巴金は、1904年11月25日に成都で生まれ、2005年10月17日に上海で亡くなった。その百年の生涯は中国の20世紀とほぼ重なっており、巴金の遺した文学作品には、中国知識人の前世紀における精神史が反映されている。

ただし中国の20世紀は、この地に生きる知識人にとっては、けっして生きやすい時代ではなかった。前半の半世紀は、統一国家の形成に遅れをとったことで列強諸国から侵略を受け、とくに日中戦争期においては身の処し方に難しい選択を迫られることもあった。後半は、社会主義国家建設を急ぐ共産党の独裁下で思想的統制を受け、有無を言わさぬ思想批判の運動にたびたび駆り立てられてしまうことになった。

巴金もこうした時代の影響を受けた、中国知識人のひとりである。戦前には代表作『家』をはじめ『憩園』『寒夜』などの長篇小説によって、著名作家のひとりとして数えられていた。共和国時代は、40歳代の半ばで迎えることになる。しかし巴金は自己形成期の十代半ばにアナキズム思想を 수용してから、活動歴や人脈ともアナキズム運動のなかで蓄積してきた経歴の持ち主であった。初期の作品にはその思想的傾向が反映されているが、巴金は思想のプロパガンダを文学活動と勘違いしてしまう類の作家ではなかった。長篇短篇を問わず作品のテーマや登場人物たちの言動をしっかりと描ききる力量をもっており、社会的弱者へのまなごしを忘れぬ作家であった。

ところが社会主義が国是となる人民共和国では、アナキズム思想の経歴が問題視され、しばしば巴金を窮地に追い込むことになった。巴金自身は新しい国家を受入れるにあたって、従来の思想をリセットし、社会や人民に学び直すという態度を表明している。それでも毛沢東時代の思想運動では、「脛に傷を持つ」者は警戒心を緩めることができなかつたのである。案の定というべきか、反右派闘争（1957年）大躍進運動（1958年）と続く、社会主義国家建設を急ぐ動きのなかで、1958年6月に「巴金批判」が顕在化してきたのであった。巴金批判はここから年末にかけてが、ピークであった。翌59年5月には収拾されるが、学术界も巻き込んだ規模とキャンペーン性をもった集中的な個人批判が、およそ一年にわたって巴金を追い込み、苦しめることになったのである。

巴金批判のほぼ2年後、巴金は故郷の成都に4ヶ月滞在することになる。1960年10月9日から1961年2月8日までである。すでに批判のほとぼりはさめていたであろうが、社会の基調に変化はない。前年の廬山会議では毛沢東によって彭徳懐国防相が解任されており（1959年8月）、成都滞在中の10月には『毛沢東選集』第4巻の刊行を機に毛沢東思想学習運動がはじまっている。なんともしらぬ世情であるが、成都にいた巴金も、上海の自宅から『毛選』4巻を急ぎ取り寄せている。

1960年は、農工業の飛躍的増産を図った大躍進運動の失敗にくわえて、1959年から続く干害や霜害などの自然災害により、全国で数千万といわれる餓死者を出していた。自然災害は3年間続いた

が、主因は人災とされる。その結果、国民経済が困窮状態に陥った。

このような社会的背景のなかで巴金は単身成都に赴き、当地の招待所に滞在して5ヶ月間を過ごした。この間の生活を、巴金は日記に記録している。日記は「成都日記」と題して、『巴金全集』第25巻（人民文学出版社、1993年）に収録され、公開された。

この日記によって、成都での生活ぶりをうかがうことができるようになった。巴金の成都滞在中については、これまでもたとえば『巴金年譜』下巻（四川文芸出版社、1989年10月）に記されていた。しかし他箇所の記述と比べて、当期の内容はきわめて簡略であり、成都を離れた月日すら記載されていない。資料的制限によるものであろうが、それだけに「成都日記」の資料価値は高いといえることができる。

本稿ではこの「成都日記」をとりあげ、成都滞在中の巴金の私生活をうかがうとともに、資料とした「成都日記」の特徴を探ってみたい。さらに成都滞在中は巴金にとってどのような意味をもったのかも、あわせて考えてみたい。

「成都日記」には日々の生活記録といった類の内容が、淡々と記されているだけである。また生活記録といっても、そもそも日記が伝えるのはその一端であろうから、記されなかったこともあると考えるべきである。そうしたことを埋め合わせる資料として、成都で巴金が授受した書信を補助資料として使用する。

書信のほとんどは、上海に残してきた家族と遣り取りした手紙で、大半は妻の蕭珊とのものである。娘の小林と交わした手紙も残っている。他に沙汀や彼得羅夫（ペトロフ?）に宛てた手紙も公開されている。手紙は『巴金全集』第22巻～第24巻（人民文学出版社、1993年～94年）に宛名別に収録されている。またこれに先立ち『巴金書簡（初稿）』（四川文芸出版社、1987年9月）も出版されていたが、これらの本に収録されているのは、巴金が書いた（発信した）手紙だけである。巴金が受け取った手紙は、家族の間で遣り取りした手紙を収録した『家書——巴金、蕭珊書信集』（李小林編、浙江文芸出版社、1994年10月）を見なければならない。『家書』と『巴金全集』に収録される巴金の手紙にはわずかに異同がみられるが、わざわざ報告すべきほどのものではない。

日記とともにこれらの手紙をあわせ読むと、巴金の生活ぶりがかなり再現される。また日記には具体的な地名・人名・屋号などの固有名詞が記されており、巴金が滞在中の時代の成都を具体化する手がかりを与えてくれる。

ところで、巴金はいつ、日記を書いていたのだろうか。推察の手がかりとなる記述が一箇所だけ、12月27日の日記にみえる。「部屋に戻って11時15分まで執筆する。日記を書き、足を洗って、12時半に就寝する」というくだりだ。例外の日もあったろうが、日記が習慣性をもつことを考えると、普段は就寝前に書かれていたと考えてよさそうだ。そのつもりで読んでも、とくに違和感を覚えるところはない。

夜に書かれる日記は、当日の記憶が鮮明な分だけ、正確な記述を期待できる。一方、夜に書く文章は感情的になりやすいともいわれる。ただし「成都日記」についていうと、感情や思考の記述は見当たらないので、夜に書かれたことで記録性により優れているといえることができよう。

## 2. 成都行の目的

巴金は、成都へ赴いた理由を明確に語っていない。ただし手がかりになりそうなものはある。

成都滞在中に、巴金は上海にいた母を亡くしている。母といっても生母ではなく、父が後妻として迎えた鄧景蓮である。上海に残っていた蕭珊は、巴金に逐一報告することなく、入院から葬儀に至るまでを切り盛りする。後に巴金に経過報告した手紙に、「心配なさらず、そのまま朝鮮戦争を描いた中篇小説の執筆を続けてください」（11月1日付）と記し、「予定どおり創作任務を完成なさいますよう、願っております」（翌2日付）とも書いている。

これより先に、巴金自身は成都に着いてすぐの手紙に、「かならず書き終えて、家に帰ります。年末には脱稿するつもりです」（10月24日蕭珊宛手紙）と書いている。またペトロフに送った手紙にも、「小説を書いたり、読書をしたりする以外、とくに仕事はなく、（中略）こちらでは中篇小説1篇と、短篇小説集1冊を書きあげるつもりでいます」（12月19日付）と書いている。蕭珊への手紙にもこれとほぼ同様のことを記しており（12月3日付）、「1月の月末には任務を完了できるだろう」と見通しまで添えている。なおここでいう「任務」とは、上級からの指示をいったものではなく、自分でたてた計画という程度の意味である。

ともあれ、成都での計画の中心に中短篇小説の創作が据えられていたのはまちがいでなく、巴金は作品を書くために成都に赴いたとすることができる。たしかに自宅のある上海では、日々の雑事や訪問客で創作に没頭することがむつかしかろう。成都是長めの作品を書くのに、落ち着いた雰囲気とまとまった時間を確保できる、創作に適した環境であったと考えられる。しかも成都出身の巴金には、生活上で方言や食事の問題もおこらない。

結果的には、巴金は4篇の短篇小説<sup>1)</sup>を書きあげている。しかし中篇小説の方は最後の一章までこぎつけたものの<sup>2)</sup>、書きあげるまでには至らなかった。

文学活動に類することで、創作の他に巴金が成都で行っていたことには、『巴金文集』の改訂作業<sup>3)</sup>がある。

『巴金文集』は、民国期に巴金の著した主な作品（小説・随筆・紀行文等）を14巻にわたって収録した大型作品集で、1958年3月から刊行がはじまった。しかし刊行に水をさすかのように、というよりもむしろ『巴金文集』に狙いをつけて、同年下半期を中心に「巴金批判」が展開された。それからほぼ2年後の1960年11月24日に、巴金は成都で『巴金文集』第13巻に収録される作品の改訂をはじめている（同日付日記による）。

日記によると、12月5日に「憩園」を校了し、12月31日に「郵便局から『文集』13巻前半部ゲラを（人民文学出版社に）送る」とある。13巻前半部とは、「憩園」のことである。その後も改訂作業は続けられるが、作品名は記されない。それゆえ第13巻の後半部に収録されている「第四病室」が、いつ改訂されたのか明確でない。以後、作品名が出てくるのが、1961年1月14日付蕭珊宛の手紙のなかに見える「寒夜」である。「『文集』13巻は改訂を終えて提出した。（中略）本巻では『寒夜』の訂正が多く、時間も費やした。この作品にはたくさん欠点があるが、自分では気に入りの一篇だ。今回の改訂では、曾樹生の混乱する感情や心理を整理して書くようにした」と記している。「寒夜」は『文集』第14巻所収の長篇小説であり、曾樹生は本篇のヒロインである。

「寒夜」の改訂着手の日付がわからぬものの、2週間程度でこの長篇小説に加筆訂正を施したもの

と推測される。他方で創作も進めていたから、巴金はかなりの勢いでゲラに手を加えていたことがうかがえる。もたついていると、いつまた「巴金批判」なるものに見舞われるかわからず、そうなれば『巴金文集』の刊行が中断されてしまうと、案じていたのかもしれない。

ともあれ、『巴金文集』収録作品への改訂作業も、成都での仕事であった。

以上の創作や改訂作業などの文筆活動のほかに、巴金が成都滞在中に行った事のなかには、墓の移転があった。

巴金は成都生まれであるが、祖籍は浙江省嘉興にある。4代前の高祖父李文熙が入蜀して以来、成都の地に落ち着いたのであった。巴金が成都滞在中に移転させた墓は、天回鎮（成都市中心部から約10キロ北方の郊外）にあった両親と長兄の眠る墓であった<sup>4)</sup>。

墓の移転とは、墓地を変更するだけではない。遺体は土葬されているので、まずこれを掘り起こし<sup>5)</sup>、茶毘にふしてから新しい墓地に移すのである。これらの作業は個人的に行うことができず、役所の許可と按配があつて可能となる。

墓の移転は1961年1月29日に行われたが、本件について1960年11月7日付蕭珊宛の手紙で、すでに話題にのせている。ただし義母の葬儀に絡めて書いており、主題の扱いはではない。こうした書きぶりからして、成都行の目的に当初から墓の移転が入っていたとは思えない。350元余の費用<sup>6)</sup>を慌てて工面したことも考えあわせると、成都に到着後に浮上した課題であったと思われる。

### 3. 「日記」からうかがう成都での生活

#### (1) 巴金の一日

成都滞在中に、巴金は二度引越しをしている。

10月9日に到着して旅装を解いたのは、永興巷招待所であった。ここには一週間滞在しただけ(16日まで)であった。もともと仮住まいで、14日には引越し先が決まったようだ<sup>7)</sup>。

10月16日から11月9日までは、三槐樹招待所で暮らしている。他の滞在者がいなかったのも、静かで創作には申し分のない環境だと巴金は気に入っていたが、突然所管の変更があり<sup>8)</sup>、3週間ばかりで引越しをよぎなくされた。

最後に落ち着いたのは、学道街招待所である。11月9日から、年をまたいで2月8日に成都を離れるまで、3ヶ月間ここに住んだ。成都随一の繁華街である春熙路や塩市口のそばで、三箇所のみなかでいちばんにぎやかな場所にある。

ではこれらの招待所で、巴金はどんな一日を送っていたのだろうか。

日記のなかから、2日分ほどサンプリングしてみる。まずは巴金の誕生日の11月24日である。(なおカッコ内小文字は筆者による補注である——以下同)

8時起床。8時半朝食。食後に散歩する。張老（四川省副省長の張秀熟）がやってきてしばらく話す。『文集』（『巴金文集』）を改訂する。小五（甥の李致）が来て、昼食をともにする。12時半帰る。1時半まで昼寝。小四（姪の国瑩）がやってきてしばらくいる。判子を取りに行ってもら



う。執筆。5時前に小四が戻ってきたので、一緒に夕食をとる。5時半すぎに帰る。散歩して、8時から執筆、12時就寝。

もう一日は、滞在の折り返し点になる12月9日の日記である。

8時起床。8時45分朝食。敷地内を散歩する。風邪が幾分よくなる。部屋で11時まで執筆。休憩して、新聞を読む。12時昼食。珍（妻の蕭珊）から手紙が届く。15分間昼寝をする。2時すぎから5時まで執筆。5時15分夕飯。張老がやってきて、映画「革命の名義」に誘ってくれる。李致夫妻が来て、6時半までいる。7時10分張老と青年宮に行く。10時半すぎ帰宅。映画はよくできていた。帰宅後すぐに口をすすぎ、足を洗う。11時半就寝。

以上の両日は、特別なことのあった日ではない。いわば巴金の日常である。

巴金の標準的な一日は、「起床→朝食→散歩→午前中の仕事（訪問客）→昼食→昼寝→午後の仕事（訪問客）→夕食→散歩・観劇（訪問客）→帰宅後仕事や作業→就寝」というふうの流れでゆく。これを基本形として、毎日規則正しく、強い意志に支えられた生活態度で過ごしてゆくのである。

## (2) 生活習慣など

特徴的な点を、いくつか指摘しておこう。

まず、朝はさほど早く起きない。11月中旬まではほぼ7時30分、それ以降は8時が平均的な起床時間である。ただし北京標準時間より、成都是経度のうえでは1時間の実質的時差があるので、冬季の日の出時間を考えると寝坊とはいえない。

就寝時間は、12時から12時30分と徐々に遅くなってゆき、1月には午前1時が平均的な就寝時間となる。これは中篇小説の執筆などで、追い込みを図ったことによるものであろう。

それにしても、巴金はよく眠る。午前1時に寝て8時に起きると、7時間も睡眠をとっている勘定だ。さらに当時の一般的な生活習慣ではあるものの、よほどのことでもないかぎり昼寝も欠かさない。巴金は56歳であったから、成都では総じてよく眠れたということである。

食事に関しては、三度の時間を必ず記録する。大躍進の失政で全国的に食糧難におちいついたため、食事については敏感になっていただろう。招待所に宿泊している巴金の場合、食費は上海の蕭珊から送られてくる食料切符で後払い精算していた。一日1斤で計算されていたようだ<sup>9)</sup>。なお食事内容は、特別な時を除いて記されていない<sup>10)</sup>。そこで日常の食生活はよく把握できないが、夕食の時間がずいぶん早いことに気付かされる。これはほぼ毎日芝居を観に出かけることと、関連しているのかもしれない。

訪問客の多さも、日記がよく伝えるところである。巴金の交友関係は、親戚から旧友、そして川劇俳優に至るまで幅広い。日記には訪問を受けた場合にかぎらず、外出先での邂逅も含めて、面会した人名を包み隠さず記しているように見える。これによって巴金のもつ人間関係をうかがうことができるので、資料としても貴重だ。以下に一例として、正月（新暦）2日の日記から一部を引いておく。

……3時に李宗林一家が来る。3時半すぎには沙汀、元卉（八宝街にあった川劇院青年劇団所属の女優舒元卉）がやってきた。国瑩、国焯（彼女たちは午後3時、炊事員の趙同志が体育館から連れてきた）、国焯の三姉妹もやってきた。（西船も来たが30分で帰った）程子健（四川省委統戦部副部長）も来た。今日は李宗林宅に招待され、大麴酒（銘酒瀘州大曲の類）を2杯半飲んだ。7時人民劇場に張老（張秀熟）、沙汀、程部長たちと行き、芝居をみた。10時帰宅してゲラを校正する。足を洗って、12時15分就寝。

ここに名のあがる人たちは、炊事員の趙を除いて、巴金宅によく顔を出す人たちである。この日はそろって芝居見物に出かけたが、巴金の一日はここで終わらない。帰宅後も机に向っている。珍しいことではない。巴金はこのようにして、毎日規則正しく執筆活動を行っているのである。

ただ就寝前に足を洗って寝ることが多く、二・三日に1回の割合で記述がみえる。入浴は10月に4回、11月に2回記録があるだけだ。10月下旬からは風呂屋「沂春」に十日に1回のペースで通いはじめる。入浴関係の記述は、1月以降は消える。なお、散髪は二十日に一度のペースで行っている。

日記にもみえたとおり、巴金は酒を飲む。李宗林宅での新年会と思える夕食でも、酒を飲んでいゝる。しかし「2杯半」飲んだと、わざわざ「半」杯を記すところから、酒量は多くなさそうにみえる。その証拠として、1月16日のことをあげておく。この日は舒元卉のいる川劇院青年劇団の創設二周年祝賀会が催され、巴金は李宗林とともに参加した。祝賀会で白酒（茅台酒の類の蒸留酒）を数杯飲み、日記では「酔った」と記されているだけであるが、蕭珊宛の手紙（1月16日付）によると、帰宅後に二度吐いたのであった。

ついでながら巴金は、煙草も吸う。日記には記述が見当たらないが、蕭珊への手紙の中に喫煙を示す記述がみえる。10月25日付書信には、煙草の量が増えてきたことに絡めて、「煙草を吸うと筆が大胆になる」などと書いている。今なら顔をしかめられてしまいそうな記述だが、煙草のパッケージを集める息子（小棠）のために、珍しい銘柄を探す父親としての優しい姿もあった<sup>11)</sup>。

### (3) 芝居を巡って

巴金は成都で、ほぼ毎日芝居を観ている。蕭珊には「ここしばらく変化に乏しい単調な暮らしを送っています。そこで夕方にはたまに芝居を観に出かけます」（10月21日付手紙）と書き送っている。ところが日記を見ると、連日劇場通いをしていたことがわかる。2ヶ月後の手紙には「劇場で過ごす3時間は、なんといっても疲れた後の楽しみです」（12月21日付手紙）と書いているが、たしかに唯一の娯楽であったように見受けられる。

巴金の芝居好きの姿は、たとえば1月16日の行動によく表れている。この日は昼間の祝賀会（先述）で酒を飲み、帰宅後二度も吐いた日だ。それでも当日券を電話で取り、6時すぎに錦江劇場まで芝居を観に行っている。

巴金は日記のなかで、芝居の演目もときどき記している。しかし演目よりも頻繁に、おそらく欠かさず記録していることがある。それはチケットの購入記録である。

巴金の元には、劇場や役者からたびたびチケットが送られてくる。10月28日には、統戦部からも送られてきた。これらは招待券であり、巴金は身銭をきっていない。

もっとも成都に来た当初は、李宗林や張秀熟や沙汀ら友人に連れて行ってもらっているが、この

場合は個人的な交友関係に帰することだ。日記にチケットの購入を記しはじめるのは、11月16日以降のことである（ただし購入金額の記載はいっさい見えない）。購入するチケットは前売り券で、これで友人を誘ったり、親戚を招待したりしている。

成都滞在中に沙汀に送った手紙（12月9日付）が一通残っているが、四川歌舞団のチケット8枚の購入を、文聯に融通をつけてもらうよう依頼している。そして「芝居に招待したいので、お金は私の方でかならず払います」と書いている。なおこのチケットは、元旦に姪の国焜や国瑩一家を招待したときに使った模様だ。

基本的に巴金は、招待券に甘えていない。「近ごろ川劇（四川方言で演じられる地方劇）をよく観にいくので、劇団からしょっちゅうチケットを送ってくるようになった。そこで私もよく劇場の近くに散歩に出かけてはチケットを購入し、人を招待しているのです」（12月21日蕭珊宛手紙）と記すとおりである。巴金の金銭感覚（金額のことではなく、精算など態度面での感覚）は、チケットのみならず、招待所での食料切符や買い物などにもよく表れており、人に金のことで甘えたりはしないのである。

なお巴金の出向いた劇場名は、日記によく記録されている。それによると四川劇場、成都劇場、新声劇場などいくつもあるが、なかでも人民劇場と錦江劇場には、頻繁に訪れていることがわかる。ただし日記には劇場名が記されているのみで、どうしてこのふたつの劇場なのか、その偏りについては説明がない。ところが蕭珊への手紙には、偏りの背景に成都の交通事情があることが記述されている。

当時の成都是ガソリン不足が深刻化しており、路線バスですらつぎつぎと廃線に追い込まれていた。なんとわずか2路線しか走っていなかったという。（12月3日付蕭珊宛手紙）四川省統戦部部長の李宗林は、巴金が自動車の使用を遠慮しないように気遣うが、巴金は「芝居見物や遊興のために、車を出してもらうなんてできません。それで元弁たちが八宝街<sup>12)</sup>で上演していても、めったに行けないのです」（同月14日付同前）ということになる。八宝街は巴金の宿舎のある学道街から北西に10キロほど離れている。元弁が川劇院青年劇団（八宝街）のチケットをたびたび届けにくる様子は日記にも記録されているが、巴金はなかなかその厚意に応えられなかったのであった。

そこで「芝居を見に行くのは、いつも人民劇場になってしまいます。歩いて20分もかからないからです」（12月3日付同前）ということになる。なお錦江劇場の場所は不明だが、錦江大橋や錦江賓館のあたりだとすると、学道街から徒歩で半時間程度の距離である。

巴金が人民劇場と錦江劇場に足繁く通った背景には、ガソリンの欠乏という経済問題があったのだった。

#### 4. 「成都日記」の不思議な側面

巴金の「成都日記」を読んでいると、不思議に思うことがいくつか出てくる。

不思議というのは、記述の奇怪さではなく、記述しない態度についての感想である。

たとえば、日記にその日の天候を記すのは決まりごとのように思えるが、「成都日記」には天候の記述はない。例外的に10月26日27日の濃霧の記録と、「小雨について招待所に歩いて戻った」（同

18日)や「大雨のため(曲芸を見に行くのを)延期した」(11月1日)という雨の記述が見える程度である。

巴金はレインコートの送付を蕭珊に依頼する手紙のなかで「こちらでは夕方よく雨が降ります」(10月16日付蕭珊宛手紙)と記している。もともと成都周辺は、「蜀犬日に吠ゆ」といわれるくらい、日照に恵まれない地域である。だから連日「曇天」と繰り返しても面白みがない、と思ったのかもしれない。ただし巴金の残した他の日記を見ても、天候記録にはあまり熱心でないことがわかる。「成都日記」に記述がないのは、成都だけのことではなく、巴金の習性なのであろう。

ところで日記に出納を記す者は多い。しかし「成都日記」には、金銭に関する記述はほとんど見当たらない。先のチケット代金の無記載と同様である。これは巴金が金銭管理に無頓着であったことを意味するものではない。先述したとおり、墓の移転費や食費などの招待所の経費について、巴金は予めよく見積りをたてて、必要額をたびたび計算している。

それでも出納の記録を、日記には記さないのである。蕭珊から為替送金を受け取った記録も、日記には書きつけておらず手紙に残っているだけである。そこで金銭にまつわる記録のうち、おもしろそうなものをいくつか蕭珊宛手紙から抽出しておく。

巴金は『解放軍文芸』に掲載した短篇小説「回家」の原稿料を、成都で受け取っている。原稿料は、100元であった(1月14日)。これは当時上海の市街地での小麦の小売価格が、50kgで17元であった<sup>13)</sup>ことからして、かなりの高額であるといえる。

高額を手にした巴金は、成都で悠々自適に暮らしていたのかという疑いが生ずるかもしれない。そこで巴金の懐具合を探るために、どれほどの現金を所持していたのか見ておこう。

11月23日に、巴金が手元に所持していた現金は、200元余であった。ところが墓の移転計画が浮上し、その経費として400元が見込まれたので、蕭珊に同額の送金を依頼する(11月26日)。蕭珊は12月10日に満額送金するが、12月21日に巴金はさらに400元の送金を依頼。これに対して蕭珊は、1月10日ごろの送金を約束している(1月3日)。

1月16日、巴金の手持ちの現金は300元余であり、帰路の費用も含めて不足を感じて、さらに200元の送金を二度要求している(1月16日・27日)。その後火葬と墓の移転を行って350元かかった<sup>14)</sup>ので、手元不如意を覚え、またも送金を依頼している。

上海への帰宅が近づくにつれ、巴金は招待所の精算や帰路の費用が心配になり、再三にわたって追加送金を依頼していた。蕭珊が工面した百元単位の送金は、高額ゆえに他者に知られると非難材料に使用されかねなかつただろう。巴金が日記に出納を記さなかつたのは、煩わしい事態を招かない用心であったと考えてもいいだろう。

さて、「成都日記」でいちばん不思議に思えるところは、巴金が日記中に個人的思いや感想を記さず、淡々と日々のできごとのみを綴っている点にある。日記は生活の記録ではあるが、私情を書き綴る場所でもある。しかし「成都日記」には喜怒哀楽の表現がなく、巴金は日記のなかで無表情を貫き通しているようにみえる。

たとえば巴金が故居(生家)跡<sup>15)</sup>を訪れている記録が、二箇所に見える。10月20日と10月31日である。これらは三槐樹招待所に落ち着いて間もないころのことである。三槐樹から生家のあった正通順街まではおよそ4kmあり、歩いて半時間余程度の距離である。散歩の目的地としてほどよ



いところに、生家があったといえよう。

ところが日記には、それぞれ「双眼井まで散歩した」「正通順街まで散歩した」と書かれているのみで、感想はまったく記されていない。訪問してなんらかの思いを抱いたはずだと考えられるのに、それは記されず、手がかりさえも残していない。そもそも生家のあった場所を示す「双眼井」「正通順街」という書き方からして、直接的な表現を避けているように思われる。

日記に個人的な感情を記さないのは、上海の義母（鄧景蓬）を亡くしたときも同様であった。計報は10月27日に届くが、日記には「11時半に沙汀がやってきて、母の危篤と逝去を伝える電報を三通、届けてくれた」と記すのみである。ところが蕭珊への手紙には、母を亡くしたつらさを記している（10月27日、29日、11月5日）。手紙に表している感情を日記に書かないというのは、「成都日記」のもつ特徴といってよい。

では日記に出納が記されず、個人的感情が綴られないことを、どう考えればよいのだろうか。巴金が金銭に無頓着でないことは、劇場チケットの購入をこまめに記録しているところにも現れていた。私情の記載がないといっても、もちろん感情を押し殺して暮らしていたわけではなかろう。となると巴金はなんらかの意思をもって、日記を綴っていたと思われてくる。

生活記録を的確に記しつつも、感情や個人的な出納を記さないという記述スタイルは、業務日誌を思わせる。それは他者（上司）の点検を受けることを前提にして、日々の業務を記録する報告書である。巴金の日記は、これに近い。

日記が他者からの検査を受けてもよいように、巴金は十分警戒して綴っていたのではないだろうか。巴金批判を経た身には、再度批判を受けた場合に、日記が「反革命」の証拠物件として押収された場合のことでまで用心していた、と考えてもおかしくない。

感想を記さず出納を隠す「成都日記」の記述スタイルは、警戒心の結晶といえる。この警戒心は、巴金が生来持っていたものではなく、共和国以降の度重なる政治運動や大躍進時代の社会的雰囲気、日記の記述にまで及んでしまったものと考えてよいだろう。

## 5. 成都滞在の意味

「成都日記」には日々の出来事が淡々と記されているので、成都滞在中の生活ぶりがよく伝わってくる。巴金の警戒心は、コメントの記述を避けているだけで、訪問先や交友関係などまで隠しているようには見えない。むしろ自分の行動を包み隠さず記すことで、かえって嫌疑のかかるのを防いでいるように思われる。このような記述スタイルも、難しい時代を生きる際の工夫であり、知恵であろう。

日記をとおして成都滞在中の巴金の姿を追っていると、友人の多さと、彼らから受ける手厚いもてなしや無償の気配りに、巴金が築いてきた人間関係の豊かさを思わずにいられない。また父方母方を問わず多くの親戚の登場や、排行で記される親族に示す心遣いと日常的な交流などから、ここ成都は巴金の故郷であることをつくづく思い知らされてしまう。

豊かな交友関係は、巴金批判を経ても旧交が温まることを確認することになっただろうし、親戚との交流は、自分のアイデンティティを改めて認識することになったと思われる。家族に対しても、

しばらく離れて暮らすことで、いっそうきずなを深めることになっただろう<sup>16)</sup>。

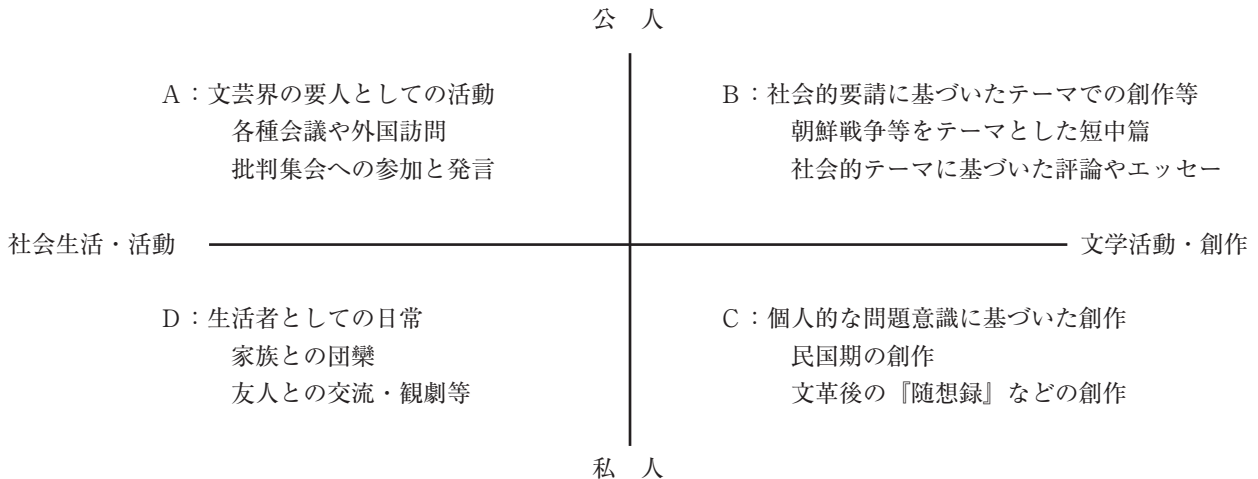
巴金は成都で短篇小説4篇と、一章分を残して未完になったとはいえ10万6千字の中篇小説を書き上げている。ここにみえる旺盛な創作欲と成果は、家族、親戚、友人たちとのきずなに支えられた結果であったとっていいだろう。いわば個人的な人間関係のなかで、巴金は成都での生活を充実させたのであるが、逆の面からいうとその条件を提供したのが、成都であった。

巴金の成都での生活の意味を考える手がかりとして、右回りにAからDの4つのゾーンに分けたマトリクスを使ってみる（下図参照）。

人民共和国下で文連副主席や作家協会副主席などのたくさんの肩書きを持った巴金は、社会的な活動に忙殺されてしまう。図でいうと、Aのゾーンにおける活動であった。

また創作においても、人民共和国下では社会的活動に基づいた作品が多く、公式的な見解や図式的なテーマを載せた作品の域を出るものではなかった。図では、Bのゾーンにおける創作である。

これらAやBでの活動は、いずれも巴金が公人としての意識で行ってきたものである。成都に赴くまでの巴金は、グラフの上半分で活動してきたといえる。



ところが成都での生活は、グラフの下半分で行われている。

創作は、テーマ小説から抜け切れてはいないが、巴金の意識ではテーマの指定を受けて「書かされている」のではなく、自分の意志で「書いている」。『四川文学』や『上海文学』への投稿は、義務ではなく、巴金の意志に基づいたものであった<sup>17)</sup>。『巴金文集』の校正も含めて、Bの意識を引きずりながらも、意識的にはCのゾーンでの文学活動であったと見なせるであろう。

成都での生活は、公的な活動がほとんどなかっただけに、Dのゾーンで営まれていた。「成都日記」はその記録なのである。

このように巴金の成都滞在中の活動は、大半が私人としての部分で行われており、創作の活性化もグラフの下半分で果たされたと見なすことができるのである。

成都が提供した条件とは、CとDのゾーンに属しているものであった。

こうして巴金は成都滞在によって、心機一転の機会を得ることができたのである。蘇生感すら持ったのではなかろうか。

ただし巴金にとっては、いつまた批判の対象になるかもしれぬ不安も抱えたままであったろう。故なき非難を避けるためにも、巴金は日記を書き、日々の生活を「業務日誌」のごとく書き記して、正確な報告書を準備しておこうとしたと思われるのである。起床時間にはじまり、三度の食事時間の記録が繰り返される内容は、安全策としては上策である。

固有名詞が頻出する「成都日記」は、研究者には貴重な資料となるが、当の巴金には日常生活の記録とともに、窮地に立たされた時の証拠・証明の役目も兼ね備えたものと思われる。そのためにも時刻や外出先、交遊者名まで克明に、そして正確に記述する必要があった。

正確に記述するためには、日記が翌日ではなく、当日の就寝前に書くほうが望ましいであろう。

「成都日記」は、巴金の私生活をよく伝えはするが、個人的感情や思考が書き込まれず、巴金の内面をつかませない姿勢に貫かれている。日記が個人の内面記録だとする観点から見ると、「成都日記」はなんとも特殊な日記ということが出来る。しかし記録性という面からすると、信用度の高い条件がそろっているのである。

## 注

- 1) 巴金は7篇の短篇小説をまとめて一冊にしようと考えていた(12月3日付蕭珊への手紙)。巴金が成都で書いた短篇小説は、  
「回家」1960年10月15日『解放軍文芸』1960年11月号  
「軍長的心」1960年11月18日(「附記」日付1960年11月25日)『人民文学』1961年1・2月合併号  
「李大海」1960年12月2日(「附記」あり)『上海文学』1961年1月号(発表時の題は「無畏戦士李大海」)  
「再見」1960年12月10日『四川文学』1961年4月号  
以上の4篇である。
- 2) 『巴金年譜』では、1960年12月の項で、「中篇小説『三同志』を創作するも、未完成」と記されている。巴金は蕭珊への手紙に「中篇はまだ5万字ほど」(12月3日付)と述べているが、1ヶ月余り後の手紙には「中篇は8万字まで書いた。あと2万字で結末をつけようと考えている」(1月16日付)と書いている。その後「10万6千字まで書いた」(1月31日付)が、「あと一章分が書けず」(2月4日付)に成都を離れる。こうして中篇小説は最終章を残して、完成されなかった。
- 3) 加筆訂正の様相については、巴金の出世作で思想的に問題視されることの多い「滅亡」をとりあげ考察したことがある。(拙稿「巴金『滅亡』の版本について」『啞哑』第28号 啞哑之会 1995年12月15日)。なお巴金が成都で手直した「憩園」については、多くの箇所に加筆の後が認められるものの、巴金の文学観の変化に及ぶほどの訂正は見当たらない。
- 4) 巴金は1月31日付蕭珊宛手紙のなかで「棺おけを開けて三人の死者の顔を見た」と書いているが、これに先立ち葬儀場で打合せをした後には「全部で6つの棺おけが必要で、少なくとも4つ準備しなければならない」(11月23日付蕭珊宛手紙)と書いている。結局、墓地に土葬されていた遺体の総数はよくわからない。
- 5) 巴金は遺体の様子を蕭珊に書き送っている。描写は具体的で、「母は死後47年を経ているのに今も生きているような顔つきであった。父の方は黒ずんでいて、目は見開き、口は開いて歯が見えていた」と表している(1961年1月31日付)
- 6) 11月26日付手紙で、巴金は墓の移転費用を200元と見積り、蕭珊に為替で400元(生活費も含めて)の送金を依頼している。1月16日付手紙では移転費用を百数十元と見積もっているが、結局「全部で350余元を持っていかれた」ので、「成都での滞在費用を計算してみると、手持ちの金が不足してしまったようだ」(1月31日付蕭珊宛手紙)と慌てている。
- 7) 蕭珊宛10月9日の手紙に「今のところ住居がまだ決まっていないので、しばらく手紙の宛先は、布后街二号四川省文聯沙汀気付で送ってください」と書いている。また同16日付手紙には「おととい住居が決まりました」と記している。
- 8) 蕭珊宛10月25日の手紙に「今いる成都市人民委員会招待所が、突然四川省人民委員会の管轄に変わり、

新機関の宿舎になることになりました。所長や幹部も全員が退去します」と書いている。

- 9) 10月24日付蕭珊宛巴金の手紙に「こちらでは毎日1斤の食料切符がいります。(みなよく気遣ってくれるので、値切ることなんてできません)」と記している。なお食糧難は、上海にいる巴金の家族にも及んでおり、蕭珊が遣り繰りに苦労していた。
- 10) 日記には記述が見られぬものの、11月21日付蕭珊宛手紙には「朝は1ポンドの牛乳と、落し卵を2個食べています」とみえる。
- 11) 10月11日付小林小棠宛の手紙に「今日の午後売店で雲南の『紅塔山』を買いました。この煙草は個旧(雲南省南部の地名)で吸ったことがあり、なかなかいけます。棠ちゃんにパッケージをあげます。今後も新しいのを探しあてたら、きっとまた送ってあげましょう」と書いている。
- 12) 八宝街に、舒元卉の所属する川劇院青年劇団があった。場所は、数年前まで八宝街にあった紅光影劇院の所ではないかと推察する。
- 13) 『上海価格志』(上海社会科学出版社 1998年11月)による。小麦価格は1964年の数値であるが、食品の小売価格指数が1961年と同じなので、17元と推測している。なお文化面では、劇場チケットを例にとると、1961年当時、上海京劇院周信芳院長演出の最高価格のチケットで2元であった。
- 14) 上海では巴金の義母鄧景蓬の墓地(墓穴)代だけで、309元かかっている(10月28日付蕭珊の手紙)。葬儀費用の総額は、800元をこえている(11月2日付蕭珊の手紙)。成都での火葬と移転埋葬費用は、上海に比べると安価であったと考えられる。
- 15) 生家のあった正通順街の屋敷は、当時すでに戦旗歌舞団の所管になっていた。
- 16) 成都に赴く前に、巴金の家庭が問題を抱えていたかどうかはわからない。ただ巴金の家庭に親戚が同居しているので、日常の些事に類することで行き違いが生じていたことは、巴金に宛てた蕭珊の手紙からうかがうことができる。義母鄧景蓬についても、巴金は「ここ一二年私のいうことを聞き入れてくれて、小さなことは我慢して、もう少し母に譲ってくれていたら、もっと楽しく過ごさせてあげられたのに」と述べており、嫁姑間で何らかのトラブルを抱えていた節を感じさせる。ただし巴金は、留守宅を切り盛りし、義母の葬儀までやり遂げた蕭珊に対して、「私の不在で、たくさんの負担をかけてしまった。一所懸命に多事をこなしてくれたのだから、故人には十分尽くしたのです。自分を責めることはありません」と労りのことばをかけている(11月9日蕭珊宛手紙)。基本的に巴金は蕭珊への感謝の気持ちを持続しており、二人の子供たちにも愛情を注いでいることは、手紙からよくうかがえる。
- 17) 『四川文学』への投稿は沙汀の依頼を受け(11月29日付蕭珊宛手紙)、さらに同誌一月号の原稿不足を見かねて(12月3日付同前)承諾したものであった。『上海文学』への投稿は、編集に携る蕭珊の苦境(12月17日付巴金宛手紙)を見かねて協力した模様である。さらに『人民文学』への投稿も、劉白羽の依頼を受けていたものであった(11月15日付同前)。

(東洋大学文学部教授)